

## 風を起こす &lt;第26回&gt;

## まちを、人を、輝かせたい！

多気町まちの宝創造特命監

## 岸川 政之さん

少子化が進む社会で大きな力ぎを握るのが若者。若い世代があきらめた社会の先行きは暗いが、若い世代が輝く社会には希望が見える。だからこそ、若い力をいかにして引き出すかは、社会全体にかかわる切実な課題である。



聞きしに勝る大盛況ぶりだった。余裕をもって到着したつもりの30分前で、入り口に置かれた順番待ちリストは既に2枚目に突入。午前11時の開店を待たずして「完売御礼」の札が掛かった。

三重県多気町<sup>たき</sup>。人口約1万5000人の何の変哲もない町で、この集客力！「まごの店」恐るべしである。運営するのは多気町にある三重県立相可<sup>おうか</sup>高校・食物調理クラブの生徒たち。高校生レストラン「まごの店」は2002年に料理研修施設としてオープンし、土日祝日のみ営業している。

伝統野菜の伊勢いもを練り込んだうどん、伊勢湾で獲れた真鯛か松阪牛を選べるお茶

漬けなど、地元食材にこだわったメニューの中から一番人気の「花御膳」を味わって、盛況ぶりに合点がいった。カラッと揚げつつ天ぷらをメインに、丁寧に面取りされた煮物、上品な味つけの和え物など、プロ顔負けの料理がたった1200円でいただけるのだ。ふかふかのだし巻きは、追加注文したくなるほどガツンとやられた。

料理をさらにおいしくしているのが、きびきびと働く高校生たちの姿。まっ白なコック服の厨房担当の子も、ビシッと決めた黒服のフロア担当の子もみんな一生懸命で、見ているだけで爽やかな気持ちになれる。

「彼らは朝6時過ぎに準備を始めてから、

[きしかわ まさゆき]  
1957年、三重県生まれ。大学卒業後、多気町役場入庁。税務課を振り出しに、教育委員会、総務課、企画調整課、農林商工課等を経て2011年より現職。多気町まちづくり仕掛人塾・K塾主宰、総務省地域人材ネット登録のほか、総理主催の議員と有識者会議委員としても活躍中。著書に『高校生レストランの奇跡』（伊勢新聞社刊、2011年）がある。

ほぼ立ちっぱなしです。一段落して昼ごはんを食べるのが3時過ぎですからね。本当にすごいですよ」

多気町まちの宝創造特命監・岸川政之さんは、その働きぶりに心から感心する。「まごの店」の仕掛け人だが、そのスタンスはあくまでも黒子。

「すごい生徒がいて、それをサポートしているすごい先生がいて、私はその応援団にな



ただけです。上昇していく彼らが輝きすぎて、底のほうにいた私まで照らし出されただけなんです」

岸川さんは謙遜するが、ここに至るまでの辛労は想像するに余りある。

### 自分自身の考え方を変えるしかない

今でこそカリスマ公務員として一目置かれる岸川さんだが、入庁後数年間は役所の仕事で嫌で嫌でたまらなかった。役所の慣習になじめず、仕事のやり方にも疑問があつたからだ。「ここは俺のおる所やない！」――

そう思った岸川さんは、配属先の税務課で仕事を覚えながら、独立を目指して税理士の勉強を始めた。しかし、しばらくして現実が見えてくると、それがいかに険しい道であるかが理解できた。かと言って、田舎で働ける場所など限られている。先が見えないまま一人悶々とする日々……

「ずいぶん長い間悩んだ末に辿り着いた答えは、自分自身の考え方を変えるしかないということです。その方法として、自分が3人いると考えることにしました。仕事をしている時の自分、家族という時の自分、友達という時の自分。それぞれを100%で頑張る、全部で300%の男を目指そう。この考え方で納得できるところまでやって、ダメだったら辞めようと思ったのです」

それからというもの、岸川さんはフィールドを求めて地域に飛び出した。文化的イベントがほとんどなかった町に笑いの文化を、と「ふるさと寄席」を主催した。日本一、世界一になる記録を残そうと「長時間ソフトボール大会」を執行し、大会時間123時間32分でギネスブックに掲載された。自分が仕掛けたことで町が盛り上がりつつ様子を目の当たりにしながら、岸川さんはまちづくりのおもしろさに目覚めていった。

一方、職場では得意のコンピュータスキルを発揮し、周囲から評価されるようになった。情報化の波が押し寄せる中、役所内での作業を簡略化するプログラムを次々に開発して、重宝された。

仕事ぶりが認められたのか、以前から関心のあつた農林商工課に配属された。これが大きな転機となった。

専業農家にスポットを当てて紹介するイベントで農産物の試食会も開くことになり、このとき出会ったのが相可高校・食物調理クラブの生徒たちと村林新吾先生だった。気軽に頼んだ試食会の調理で、テーブルに並んだのはホテルの結婚式と見まがうほどの料理の数々。

「感動しましたね。この町に、これほどの料理をつくれるすごい高校生たちがいたのか！ それを指導しているすごい先生がいたのか！」と――

瞳をキラキラさせながら食のプロを目指す高校生たちに一発で惚れ込んだ岸川さんは、彼らのために何かできないかと、それまで足を踏み入れたことさえなかった高校に熱心に通い始めた。時間を忘れて村林先生と語り合う中で「実際の店で仕入れから接客、経営まで研修させてあげられたら最高」という結論に達した。

とは言え、模擬店ならともかく、高校生が営む常設の店など前代未聞。しかも、相可高校は県立だから多気町の管轄外。普通だったならあきらめるか途中で投げ出しそうなところ、わずか8カ月で高校生レストラン「まごの店」をオープンさせた。「彼らを輝かせる場をつくりたい」――その一心で岸川さんは知恵を絞る、あらゆる手法を駆使し、不可能を可能にした。





オーストラリアなど海外の高校生と日本の高校生が料理の腕を競った「高校生国際料理コンクール」部門

## 高校生の活躍がまちのエネルギーに

「まごの店」は物珍しさもあって、テレビや新聞で何度も取り上げられ話題を呼んだ。2011年には「まごの店」をモデルにテレビドラマも制作された。『高校生レストラン』の放映から既に3年以上経つが、未だに人気は衰えない。「まごの店」は今や町を代表する観光スポットであり、多気町の代名詞である。

この成功を生かし、地元食材を使ったお弁当やお総菜を提供する「せんぱいの店」もオープン。運営を担う株式会社相可フードネットは、地域の人的ネットワークの中で出資者が集まって設立され、相可高校卒業生の受け皿にもなっている。

「結婚、出産後の女性でも働ける場があれば地元に住み続けることができます。仕事がないから都会に出ていくしかない…ではなく、自分たちで選択肢をつくる。それを地域ぐるみで応援する体制をつくっていききたいと思ったのです」

岸川さんが見据えているのは地元だけではない。地域資源を生かし高校生が中心となつてビジネスを立ち上げていくプロジェクトは現在、沖縄県宮古島市、三重県南伊勢町、北海道三笠市でも進められている。

宮古島市では、高校生たちが自ら企画立案してカフェ「んまがぬ家（まごの家）」を意味する方言」を開業。紫いもや宮古そば

など地元食材を使ったオリジナルメニューも考案しながら、島の活性化を考えている。南伊勢高校南勢校舎では、ご当地キャラにちなんだスイーツをつくるため、金型製作のできる沖縄の美里工業高校とコラボ。異なる環境の高校生たちが交流することで、新たな化学変化が起きている。炭鉱閉鎖に伴う過疎化が著しい三笠市では、道立高校が市立高校として再生。食のスペシャリストを目指し全国から集まってきた高校生たちが、まちに新風を巻き起こしている。

「どの高校も、そこに至るまでには数え切れないほど感動のストーリーがありました。未来の大人である高校生たちと接し、彼らを応援していると、ダイレクトに感動をもらえる。それは私にとつてのエネルギーです」

アドバイザーとして各地を飛び回る岸川さんは、これまで接点のなかった地域や高校同士をつなぐコーディネーターとしても一役買っている。高校生にとつても、異質な他者との出会いは創造の原動力となる——「だったら、そういう場をつくってあげられないだろうか？」

多気町では昨年9月、「第1回 全国高校生“S”の交流フェア」が開催された。高校生たちが料理の技を競う「高校生国際料理コンクール」部門と、地元企業などと協力して開発した商品、地域と連携した取り組みを公開プレゼンテーションする「全国高校生スクール“S”セレクション」部門。いずれも審査員による評価はするが、イベン



「第1回 全国高校生“S”の交流フェア」の会場風景

トの一番の目的は地域を越えて集まった高校生たちの「交流」である。

開催にあたっては企画の段階から高校生たちの手にゆだねた。ビッグイベントの実行委員という貴重な経験を通して、彼らは教室では学べない多くのことを学んだだろう。

「彼らが輝けるステージがあるなら、私はそれを提供してあげたい。将来やりたいことがあるなら、その分野の一流の大人たちと出会う場を用意してあげたい。私は彼らに良い大人になってほしい。だから一生懸命になるのです」

ここまで思ってくれる大人がいたら、高校生たちだつて期待に応えたいというものだろう。



北海道から沖縄まで12校が参加した「全国高校生スクール“S”セレクション」

## 40歳を過ぎて見つけた夢

岸川さんは、十年ほど前から自分磨きも兼ねて、各地の高校などで講演している。元来人前で話すことは苦手だったが、今ではどんなに大きな会場でも、どんなに長い時間でも怖くない。

「全くのフリートークで、たくさんある引き出しの中から、参加者の顔を見ながらテーマを選んで話します」

カスタマイズされた講演はどこに行っても好評で、参加者へのアンケートでは「とても良かった」「良かった」が8割以上を占める。普通だった起居眠りが続出しそうな昼食後の体育館ですら、高校生を夢中にさせる。

「あの子たちが寝ずに質問するなんてあり得ない！」——先生方から驚嘆の声が挙がる岸川マジック。

その内容は例えばこうだ——「君たちの心の中には、後悔していることがあるかもしれない。でも、変えられないことでよくよくしても仕方がない。過去に対してエネルギーを割く必要はないんだ。未来は今、この瞬間とつながっている。未来をよくしたいと思えば、今をよくすればいいだけだ」「偏差値は社会の物差しじゃない。社会にはもつとたくさん物差しがあるんだ。君たちにも素晴らしい物差しがたくさんある」。どの言葉も「俺たちだって、やればできるんじゃないか」と背中を押してくれる。

若い頃から仕事以外のフィールドで地域に貢献してきた岸川さんだったが、仕事で地域貢献を実感できてはじめて行政の仕事の素晴らしさに気づいた。

「すごいと思う人、応援したいと思う人がいたら、どういうステージが一番輝けるかを想像し、提供するのが私の役割。長い間、自分の仕事にコンプレックスをもっていたから、人を輝かせることに喜びを感じるのかもしれない。私は必死になっている人たちと一緒に、仕事をしていきたいのです」

役所の外に飛び出していろんな人と付き合ううちに、民間の気持ち、行政の気持ち、どちらも自然と理解できるようになった。一人で二役をこなせていることに気づき、そこに可能性を感じた。

「行政マンは正しいと思ったことがやれる仕事です。しかも給料を頂きながら。同じことを民間のボランティアでやろうとすれば、自分たちでお金を稼がなければならぬし、協力者を集めるにしても相手の信用を得るところから始めないといけない。そう考えると、行政はステキな仕事ですね」

自らの人生を振り返ってみれば、夢も破れ、職業観のないまま社会人になり、世の中でずっとすねていたのかもしれない。後悔した日々もあったが、今は歩んできた道に自信をもてるようになった。

「これからは、自分が正しいと思うこと、やりたいと思うことを眉間にしわを寄せずにやってのけて、それが周りの人たちの喜びや

幸せと重なるような生き方をしたい」

定年になるまで行政マンとしてやっていくつもりだったが、来年3月末で早期退職することを決めている。

「あと3年役所にいればそれなりに何かできるかもしれません。でも、人生は一度きりです。限られた命の中でどう生きるかを考えた時、自分自身のピークとなる今後10年間を次のことに注ぎ込みたかった」

これまでの実績とこれからの伸び代が高く評価され、次なるステージは既に用意されている。とは言っても、成果にシビアな民間企業への転職。当然不安がありそうなのだが、岸川さんにとってはむしろ期待のほどが大きい。新しい地域密着型の教育など5つのチャレンジ目標を定め、実現に向けて具体的なビジョンも描いている。やりたいことは、いくらだってあるのだ。

「まごの店」で舌鼓を打った帰りぎわ、隣接する研修室をのぞくと、九州からやって来た高校生たちを前に熱く語る岸川さんの姿があった——「私は40歳を過ぎて、ようやく夢を見つけました。君たちの夢は何ですか。夢を見つけたら、そのために今できることを一生懸命やればいい。君たちの可能性は、無限大です」

(取材／ライター 更田沙良)